古代文字資料館発行『KOTONOHA』第 114 号（2012 年 5 月）

東洋文庫所蔵女真字碑断片拓本について

吉池孝一

『東洋文庫所蔵中国石刻拓本目録』(平成 14 年刊)の 2302 に「女真字碑断片　(金)付　碑陽：存 9 行行存 5 字至 9 字.　1 枚；19×21cm　　Ⅱ-16-C-1626 」(101 頁)とある。この目録によるかぎり何れの碑文の断片であるか詳らかでない。私が最初にこの拓本を見たのは平成 12 年のことであり、その当時、当該拓本につき磨滅の状態や字形の様子からみて大金得勝陀頌碑に類似しているという印象は持っていた。もっとも、雑事に紛れて確認を先延ばしにしているうちに月日が過ぎてしまった。最近になって長田夏樹先生の旧蔵拓本を調査する機会を得て、女真文字や大金得勝陀頌漢文の拓本に触れた。そこで、忘れかけていた東洋文庫所蔵の女真文字碑断片拓本を思い出し、入手していた断片拓本の写真と『女真語言文字研究』(金光平･金啓孮著、文物出版社、1980 年)所載の女真文字大金得勝陀頌碑の碑身全体の拓本とを比較してみたという次第である。

『女真語言文字研究』に付された碑身全体の拓本の写真は小さく不鮮明で、東洋文庫所蔵女真字碑断片拓本との比較は容易ではない。しかしながら、この断片拓本が大金得勝陀頌碑の一部分であるようにみえるということくらいは確認できた。そこで目星を付けた部分につき、『女真文金石志稿』(安馬彌一郎著、碧文堂、1943 年)所載大金得勝陀頌碑の翻字と比較したところ、やはり問題の断片拓本は大金得勝陀頌碑の一部分であることがわかった。断片拓本の右 1 行目は大金得勝陀頌碑の 24 行目の一部分(18 字目～23 字目)に相当する。順に 25(20～25)、26(18～25)、27(18～26)、28(19～28)、29(12～20)、30(19～29)、31(18～25)、32(1～5)となっている。これで 9 行となる。

碑文全体の拓本の他になぜこのような断片の拓本があるのかということが問題となるかもしれない。『女真語言文字新研究』(愛新覺羅 烏拉熙春著、2002 年)によると「大金得勝陀頌碑自金宣宗南遷以後失于保護，七百余年曝于曠野。清末斷爲兩截，1976 年復又斷爲三截[①]　／注①「韓光烈、徐達音：《大金得勝陀頌保護初記》，《大金得勝陀頌》建碑八百周年學術交流會論文，1985.」とある。注①の文献を参照し得なかったのは遺憾であるが、事情の一端はこれによって知ることができる。東洋文庫所蔵の女真字碑断片拓本は幾つかに割れた碑身の一つを採拓したものと理解してよいであろう。

以上のようなことは既にどなたかが言及しておられるのではなかろうかとも考えたが、それを確認する手段を持てそうもないので、なにかの参考までにと一文を草した次第である。